
■ 2022年度前期科目《ジェンダー論入門》 ■

「「闇」から見るジェンダー ——森崎和江『まっくら』を読む」

担当教員：村上 潔

第8回（2022/06/10）文書資料

●● 導入 ●●

【このコーナーでは、各回、授業内容と直接関係はないが——間接的には関係する——、担当教員が現時点で注目している情報を随時ピックアップして掲載していきます。授業内で言及する場合がありますが、言及しない場合もあります。取り上げる内容に、特に統一性はありません。各自、興味・関心と必要に応じて参考にしてください。もちろん読み飛ばしても問題ありません。☆このコーナーの内容は定期試験の出題範囲には入りません。☆】

■ ラジオ：インタビュー

◆ NHK《ラジオ深夜便》

◇ 2022年6月10日（金）午前4時台

【人生のみちしるべ】「祖父・かこさとしの背中を追って」

……中島加名（大学院生・教育支援員）

<https://www.nhk.or.jp/shinyabin/k4.html>

* 聴き逃し配信：6月17日（金）午前5:00まで

cf.

| NHK《プロフェッショナル 仕事の流儀》「ただ、こどもたちのために かこさとし 最後の記録」（2018年6月4日放送）<https://www.nhk-ondemand.jp/goods/G2018089257SA000/>

| 《NHK映像ファイル あの人に会いたい》「かこさとし（絵本作家）」（初回放送日：2020年5月1日）<https://www.nhk.jp/p/ano hito/ts/K15V8PLV63/episode/te/JWQWJ89NKN/>

■ 記事

◆ 戦後教育版画運動

◇ 前田良雄 2022 「稲作や祭り 子供版画が残す町の記憶」, 『日本経済新聞』2022年6月7日朝刊40頁（文化面）, (<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCD26AZX0W2A520C2000000/>)

—“【Exordium】今年95歳になる私の故郷、石川県羽咋（はくい）郡志賀（しか）町は「版画の町」だ。なかでも戦後まもない1950年代初頭から版画教育に熱心に取り組

んだことで知られる。志賀町版画協会の規約で「こども版画の振興」をうたいジュニア版画教室、全国こども版画コンクールin志賀などの活動を長年続け、初期から地元の小中学生の作品を保存する。そんな町は全国的に珍しいのではないだろうか。”

◇町村悠香（町田市立国際版画美術館） 2021 「[キュレーターズノート] みんな、かつては版画家だった——教育版画運動と大田耕士旧蔵版画集から考える「私たち」の戦後美術史」, 『artscape』2021年12月1日号, (https://artscape.jp/report/curator/10172818_1634.html)

—“【Exordium】一般的に「美術史」と言われるものが、果たしてどれだけ同時代の人の実感が伴うものなのか、自分がその時代に生きていたら見たり参加したりできるものだったのか、疑問に思うことがある。本当にこれは「私たち」の歴史なのだろうか。近年、フェミニズムやジェンダーの視点から戦後の美術史を見直す動きが進み、女性作家の存在に光を当てることで主流とされてきた歴史を問う展覧会が数多く開催されている。こういった動きを見ていると、これ以外の視点からも「私たち」の側に引き寄せた戦後美術史があるのではと探りたくなる。”

◆コミュニティ単位での聞き書き実践

◇横浜市ことぶき協働スペース 2022 「聞き書き本 ができました」, 『横浜市ことぶき協働スペース：マガジン』, 2022年5月13日, (<https://kotobuki.space/phvYe846/20220513>)

—“【Exordium】寿町に暮らす人が人生を語り、語られた人生を「聞き書き本」として後世に残す。横浜市ことぶき協働スペースでは、この活動を、住民の方、そしてボランティアとともに進めてきました。このほど住民同士の「聞き書き」のスタイルで、2冊の「聞き書き本」が完成しました。聞き手と語り手とボランティアの三者の協働がカタチとなった本のタイトルは『流れ行く日々』、そして『南の旅人』。語り手の思いが詰まった、味わい深い人生が綴られています。| 寿町には、昭和の時代の港湾荷役の重労働を支えた人々を含め、さまざまな苦難を乗り越えた人々が住み、中には50年以上にわたり、この町の歴史を見てきた人もいます。寿町に限らずどこの町でも、誰の人生にも、それぞれの出会いやドラマがあり、その人が主人公の物語を残すことは、時代の、その地域の暮らしの生きた証言としても味わい深いものとなります。今回創刊にたどりつけた、語る人と聞く人の共同作業である「聞き書き本」が生まれるまでに歩んできた経緯を振り返ってみます。”

◆大成した漫画家たちの活動を支えた（描かれざる）女性たちの存在

◇大山くまお 2022 「[彼女たちのトキワ荘 1] 「トキワ荘は男性ばかりの殺風景なアパートではなかったのです」 “伝説”のアパートの“ほとんど触れられていない部分”」, 『文春オンライン』, 2022年6月5日, (<https://bunshun.jp/articles/-/54797>)

—“【引用】ところで、トキワ荘の“伝説”には、ほとんど触れられていない部分がある。

「それは、何人かの漫画家には、漫画に打ち込む彼らの家事の世話をするために、母や姉が実家からやってきて同居していたことだ。『まんが道』と『愛…しりぞめし頃に…』のトキワ荘パートにも『トキワ荘の青春』にも、彼らの母親たちが住み込みで家事をする場面は描かれていない。」

◇大山くまお 2022 「[彼女たちのトキワ荘 2] 「僕はマザコンだ。かあちゃんが大好きだ」四畳半に3人暮らし、喫茶店で働き…まんが家と母親の知られざるアパート生活」, 『文春オンライン』, 2022年6月5日, (<https://bunshun.jp/articles/-/54798>)

—「【引用】自活する能力が高かった寺田ヒロオは母や姉を呼ぶことはなく、藤子不二雄と石森章太郎は生活を助けてもらうために母や姉を呼び寄せた。赤塚不二夫は母のほうから飛んできた。|それぞれ上京した事情は異なるが、あらためて資料に目を通すと、息子や弟との暮らしを楽しんでいたように見える。トキワ荘の“伝説”とともに、トキワ荘で暮らした女性たちのことも記憶にとどめておきたい。」

■映画

◆『メイド・イン・バングラデシュ』（2019年）

◇「『メイド・イン・バングラデシュ』トークイベント開催決定！」（元町映画館）

https://www.motoei.com/post_event/madeinbangladesh_event/

|日時：2022年6月12日（日）12:40の回上映終了後

|登壇者：南出和余さん（神戸女学院大学文学部准教授）

—「【Caption】世界の繊維産業を支えるバングラデシュを舞台にその過酷な労働環境と低賃金にひとりで立ち向かう女性を描いた『メイド・イン・バングラデシュ』。本作の公開を記念してトークイベントの開催が決定しました！」

*作品公式サイト：<http://pan-dora.co.jp/bangladesh/>（予告編映像あり）

~~~~ ↑以上：導入／↓以下：本論 ~~~~

●● 第8回：「「聞き書き」という行為に自覚的であること——森崎和江が重視した記録者の「責任」」 [2022/06/10] ●●

## ■導入で話したこと

◆かこさとし [加古里子]（絵本作家）

◇軍国少年／戦争体験→平和・民主主義のメッセージ

◇セツルメント運動の経験

◇庶民の暮らし・生活／地域の行事

◇子どもへの教育／子どもの視点

→◇聞き書き実践と立ち位置／情熱の源は同じ

cf. 「加古里子」 [コトバンク] <https://kotobank.jp/word/%E5%8A%A0%E5%8F%A4%E9%87%8C%E5%AD%90-461455>

cf. 「セツルメント」 [コトバンク]

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%BB%E3%83%84%E3%83%AB%E3%83%A1%E3%83%B3%E3%83%88-87441>

cf. 「セツルメント運動」 [コトバンク] <https://kotobank.jp/word/%E3%82%BB%E3%83%84%E3%83%AB%E3%83%A1%E3%83%B3%E3%83%88%E9%81%8B%E5%8B%95-2875956>

◆ 地方で教育版画運動・生活記録運動・聞き書きが精力的に展開された背景

◇ 高度経済成長で子ども・若者が大量に故郷を離れていってしまう（集団就職／出稼ぎ）：危機感／アイデンティティ構築

◇ 強固な保守的・家父長制的环境のもとに育って大人になった女性たちに対する啓蒙  
| 女性（嫁／母／娘）にも自由がある／女性の労働にも価値がある——ことを気づかせる→コミュニティの緩やかな変革を促す

cf. 「集団就職」 [コトバンク] <https://kotobank.jp/word/%E9%9B%86%E5%9B%A3%E5%B0%B1%E8%81%B7-527231>

cf. 「生活記録運動」 [コトバンク] <https://kotobank.jp/word/%E7%94%9F%E6%B4%BB%E8%A8%98%E9%8C%B2%E9%81%8B%E5%8B%95-1178627>

## ■ 前回補足

◆ 人知れず負担を強いられる人々の立場に立った「非公式」な記録の意義

◇ 中山岳 2022 「東京五輪 映画は何を検証すべきか… 霞ヶ丘アパート住民の強制退去と地域の分断描いた青山真也監督に聞く」, 『東京新聞』2022年2月7日,  
(<https://www.tokyo-np.co.jp/article/158457>)

—“【Caption】北京五輪が開幕した。メディアは一色に染まりつつあるが、たった半年前、コロナ禍で強行された東京五輪を忘れた人はいないだろう。公式記録映画のNHKドキュメンタリーが問題になっているが、そもそも、あの五輪を正面から検証した映画は少ない。映画は何を記録し、残していくべきなのか。国立競技場建設で立ち退きを強いられた住民を描いた「東京オリンピック2017 都営霞ヶ丘アパート」の青山真也監督に聞いた。”／“【引用】昨年7月に公開されたドキュメンタリー「東京オリンピック2017 都営霞ヶ丘アパート」。製作のきっかけは、2013年に住民から話を聞いたことだった。築50年前後の10棟からなる都営霞ヶ丘アパート（東京都新宿区）には当時、約130世帯が居住。若い住民の多くはすでに転居し、残っていた人の大半は高齢者だった。病気や障害がある人も目立ち、身体的にも経済的にも引っ越しが難しい人が少なくなかった。| 住民の中には、1964年の東京五輪で旧国立競技場建設のために立ち退き、このアパートに移った人もいた。「五輪の影響で2度も住まいを奪われた住民らの生活を、きちんと記録に残そう」。2014年から3年にわたりアパートに通い、80

分の作品に凝縮した。”／“開幕前は国民の多くが反対していた東京五輪。しかし、閉幕後、メディアが課題を検証する動きは鈍いと青山さんは感じている。”／“五輪に関する記録映画のあり方も考えた。1964年東京五輪を記録した公式映画には市川崑総監督の「東京オリンピック」がある。青山さんはこの作品には批判的な視点があると評価しつつ「当時、立ち退きを強いられた人々がいたことは、大会組織委員会や行政の記録にもほとんどない」と指摘する。|「霞ヶ丘アパートの住民は国立競技場建設のためにコミュニティを分断され、心と体を酷使して立ち退いた。こうした五輪の側面を市民の視点から『非公式』の映画で記録することも重要ではないか”／“「東京オリンピック2017 都営霞ヶ丘アパート」にはナレーションがなく、字幕もほとんどない。見る者は耳をそばだて、目を見開いて、映像と音声に集中することになる。人々の表情の陰影や何でもない風景が、深く心に刻まれる。多様な視点から五輪を伝える、「非公式」映画をもっと見たい。”

◆「暴力的」であることを自覚しつつ人々の生活を記録する

◇町田ノイズ（編集：服部桃子） 2022 「コミュニティはつくり直せない。東京オリンピックが壊した団地アパートから見る「真の豊かさ」とは」, 『CINRA』2022年5月30日, ([https://www.cinra.net/article/202205-tokyo2017\\_htrmmcl](https://www.cinra.net/article/202205-tokyo2017_htrmmcl))

—【引用】『東京オリンピック2017 都営霞ヶ丘アパート』は、アパートから強制退去させられた住民の2014年から2017年にかけての記録をとおして「五輪ファースト」の陰で繰り返される排除の歴史を映し出したドキュメンタリーだ。有志による東京都、五輪担当大臣への要望書提出や記者会見の様子を織り交ぜながら、住民が退去の日を迎えるまでの生活を切り取っている。大友良英が手掛けたミニマルな音楽が寄り添う本作は、感動や感傷を煽ることなく、「名もなき強大なものに終の住処を奪われた人々」を見つめる。ただ淡々と、静謐に。”／“青山：1964年、2020年のオリンピックで二度目の立ち退きを迫られている人がいるっていう話を耳にして、記録に残したいと思ったんです。二度の立ち退き、しかもその理由がオリンピックでというのは相当だなと。それで、調べたり、実際に足を運んだりしました。”／“大友：そもそもの話をしちゃうんだけど、ぼくは、基本的にドキュメンタリー映画に音楽はいらないと考えています。「普段生きている人間」に音楽をつけるってかなり暴力的なことだと思うので。[...] 同じく、ドキュメンタリー自体も暴力的だと思っていて。「あるところだけを切り取って見せる」という行為がね。だから、信頼してる人のドキュメンタリーじゃないと本当にやりたくない。でも、青山さんだし、話を聞くと興味深かった。この話って、つまりはオリンピックに象徴されるような国の成長物語に、ごく普通に生きてきた人たちの生活が壊される話じゃないですか。”／“青山：[...] この映画は高齢者の方々の部屋を淡々と撮ったものなのですが、いわば生活風景を撮ったものに「東京オリンピック」とタイトルをつけることには、ある種の暴力性があると感じていて。そのうえであえて、何か表現を重ねるべきと思いました。暴力的であることを認識しつつ、映像表現や音楽表現でしっかり向き合うというか。”／“青山：どうアパートを撮影していくか考えたときに、オリンピックによって立ち退かされようとしている住民の方を、オリンピックと真逆の

瞬間を記録に残す、というコンセプトを立てました。| オリンピックは「ハレとケ」で考えると「ハレ」で、日常生活は「ケ」になります。また、オリンピックが動的なイメージなら、この映画は静。若くて逞しいスポーツ選手たちではなく、怪我をしていたり、動きにくくなった高齢の方の身体を捉えています。”/”大友：[…] 建物は壊れたら作り直せばいいけど、コミュニティは作り直せない。生命に近いかもしれない。今回このアパートに対して東京都がやったいちばんの罪はコミュニティを壊したことだと思うんです。| それは、いままでもずっと無神経に、さまざまな場所で行なわれ続けてきたこと。「飛行場をつくったほうがいい」「地下鉄もつくったほうがいい」とか「発展したほうがいい」という大前提があって、「小さなコミュニティや弱いところは犠牲になってもいい」とまで考える人は少ないかもですが、でもわれわれのなかで、「まあしょうがない」って思う習慣がついたのが20世紀の近代化だったと思うんですよ。”/”青山：1964年のオリンピックは、多くのメディアでは、戦争から復興して高度経済成長期になるための足がかりだった、すごく良い大会だったと紹介しています。実際そうだったとは思いますが、一方でこの映画のなかで出てくるアパート住民の一人は、1964年の五輪開発で自身が立ち退いた話をしています。「妻が子どもをおぶって立ち退き反対デモに参加した」と話してくれました。| オリンピックを開催する人たちは、短い時間にワーッと盛り上げて去っていきませんが、立ち退いた彼らには移転先での新しい日常が続きます。”/”大友：100年とか1千年とか長期的な目線で見たら、青山さんの映画は、オリンピックの記録映画以上に貴重なものになると思うんです。例えば、自分の昔の写真を見ると、運動会とか「ハレ」のときの写真しかないじゃない。いまだったらスマートフォンでみんな撮るかもしれないけど、昔は特別なときしか写真を撮らなかった。だから、ぼくが住んでいた家や、街の写真は1枚もない。遠足とかの写真しかないんです。| この映画には、その記録されることのない日常が丁寧に映り込んでいます。「ハレ」の時間を残していくのではなく、「ケ」の時間を見つめていく。これは本当に大切なことだと思うんです。”/”大友：[…] 住民の方たちの様子から、自分たちの文明の根本的なあり方に対して「本当にこれでいいの？」というささやかな問いを投げかけているのが、この作品です。「オリンピック」に象徴される発展の物語より、一人ひとりの人生のほうが比較にならないくらい大切な物語なんだってことを、青山さんは見せてくれているんだと思います。”

↓

#### ◇「公式」記録を相対化する

| 国家的に/企業社会によって美化され・称揚され・煽られる要素

——その裏には隠蔽され・無視され・貶[おとし]められる要素がある

→後者をフォローするのはつねに・必然的に「非公式」な主体

↳ ドキュメンタリー制作集団/聞き書きをする作家・ジャーナリスト

◇ (華やかな祭典とは対照的な) なんとということはない「日常」(の生活/労働)を捉える視点/カメラ(：「非公式」な記録主体)の必要性・重要性

◇ 何かを奪う/支配・統制する側ではなく奪われる/支配・統制される側にフォーカス

し+後者の側に立つ

┃前者はすでに「公式」な主体が（膨大な規模の体制で）記録している：それへの抵抗の意味・役割をもつ

◇記録主体は（相対的に）特権的で+「暴力的」である（当事者の語り／イメージを成形し→発表する「力」をもっている）ことを引き受けたうえで→対象にアプローチする

┃（「力」を行使する／せざるをえない）「責任」を引き受けるということ

┃引き受ける=居直るではない

┃いかなる引き受けかたがあるのか——つねに葛藤・格闘・試行錯誤する

┃その過程では往々にして「自らも対象化する」ことになる

┃単純に「自分も（画面／文中に）登場させる」ということではない

■瀬川清子から森崎和江へ——引き継がれ展開する「女の」聞き書き

◆大門正克 2017 『語る歴史、聞く歴史——オーラル・ヒストリーの現場から』, 岩波書店（岩波新書新赤版1693）

——の確認から：続き

◇「戦後の「語る歴史、聞く歴史」の大きな特徴は、それまでほとんど対象にならなかった女性の経験を聞く歴史があらわれたことである。女性は文字史料を残すことが少なく、歴史の表舞台に登場することもきわめて限られていた。それに加えて、篠田鈺造や民俗学の瀬川清子などを除けば、戦前においても、女性が聞く歴史の対象になることはなかった。その状況が変わるのは戦後になってからである。農村や都市、炭鉱などの各所で、女性たちの経験を聞く歴史があらわれた。女性に経験を聞いた人の多くは女性だった。女性による女性を相手にした聞く歴史があらわれたのである。」（p.92）

◇「一九五〇年代には生活を記録として書く生活記録運動がひろがり、一九六〇年代まで続いた。そこでは、地域や職場における自らの生活体験とともに、母の戦争体験などを聞き、それを生活記録として書くことも行われた。文章を書く人、話を聞く人に女性が多かったことはこの運動の大きな特徴だった。」（p.96）

「戦後になると、広範な領域で女性に話を聞き、書くようになったことがわかるであろう。[...] 女性に聞いた話を民話や生活記録として【傍点：書くこと】に主眼がおかれていた。」（p.96）

◇「主に九州で女性の経験を聞いた森崎和江、山崎朋子、古庄ゆき子らは、聞き書きというかたちで、聞くことと書くことの両方に主眼をおいた。一九五〇年代末から一九七〇年代にかけて、書くことに重心をおいた段階から、両方に重心をおいた聞き書きへゆるやかに移行したとっていいだろう。一九六一年に発行された森崎和江『まっくら』のサブタイトルは「女坑夫からの聞き書き」だった。これは聞き書きを自覚した作品の登場として重要な意味をもっていた。」（p.96）

☆『まっくら』：「聞き書き」という手法・表現形態を自覚・明示した作品の登場（1960年代以降の流れの起点となる）

◇「三人の聞き書きには、語り手の語りだけでなく、語ること、聞くことに向き合い、格闘する過程が刻まれている」(p.97)

◇「女性たちからほとぼしる「エネルギー」を受けとめ、深く掘るために、森崎は、「自他の体験を全体史の中にどう位置づければいいのかと、幾年も心に抱き、なんとか文字化してその意味を問い、責任を持とう」とした。」(p.102)

☆語ること・聞くことに「向き合い」・「格闘」する過程：(完成した文章の出来とは別に) その過程自体に大きな意義

☆出会った女性たちの「エネルギー」(語りに収斂しない大きな領域・強靱な力)をどう受けとめるのか+それをどう記述(表現)するのか：書き手に課せられる大きな課題

☆自らの「責任」を自覚して(それを放棄せずに)取り組むこと

◇「森崎は敗戦前後に瀬川清子の書いたものに出会っていた」(p.104)

◇「民俗学も森崎のアトヤマの聞き書きも、いずれも歴史のなかで顧みられなかった人びとの話に耳を傾けるものだったといえよう。」(p.104)

◇「「語る歴史、聞く歴史」には、人びとの原初的なエネルギーが含まれており、森崎はそれと向き合うなかで、女たちの「聞き書き」を編み出したのであろう。」(p.105)

◇「からゆきさんを訪ねる旅の以前から山崎と森崎に交流があり、旅の出発点にあっても接点があったことは印象深い。瀬川清子の書いたものに接した経験をもって炭坑で聞き取りをした森崎和江、山崎はその森崎と接点をもちながら天草に向かったことになる。女たちの連鎖のなかで、女たちの「語る歴史、聞く歴史」が少しずつ開かれていったのである。」(p.106)

☆瀬川清子の成果に学ぶ

☆出会った人々の「原初的なエネルギー」に突き動かされる体験：聞き書きへと誘【いざな】われ→実践する→その経験のなかで方法論が構築されていく

☆「聞き書きをする女たち」の連なり・連鎖：継承と展開

◇「森崎は、[…]「資料に依ることのない女性史を掘るには、たゆみなく歩くことと自ら歴史を創るところの日常的な集団的活動の積み重ねがいる」と指摘し、さらに、「研究の成果が個体の私有へ帰すような史実の発掘法に終るならば、庶民が常に素材化されてきた歴史を越え得ないことになってしまう。私たちはここを越えていきたい」と述べた」(pp.113-114)

◇「森崎はここで聞き書きにかかわって、大事な指摘をしている。アジアや戦争を問うこと自体の困難を自覚し、資料のない女性史を掘るために歩き続け、庶民が常に素材化されてきた歴史を越えることである。」(p.114)



☆「庶民が常に素材化されてきた歴史」を「越える」

┆素材化される：一方的に聞かれ・観察され・評価される——言葉（語り）／イメージを（聞き手に）提供するだけの存在（女性・マイノリティ・過酷な環境にある人々…）

┆その「素材」から提供されたものを得る（＝益〔えき〕を享受する）のは：権威ある男性研究者／ジャーナリスト

┆語った当事者ではなく、当事者の語りを書いて発表した側（〇〇大学の△△教授／〇〇新聞の△△記者）が評価を独占する構造。：アカデミズム／ジャーナリズムの世界では強固

┆その構造に陥らないためには：アカデミズム／ジャーナリズムの（権威的・暴力的）アプローチを慎重に避ける

┆女性女性に語る・聞く（相互行為）という実践形態はその表れでもある

◇「森崎が心がけたことは何だったのか。それは、[…]「心を無にして、相手の思いの核心に耳をすます」、「相手の語りたく伝えたく思っておられることの、その肌ざわりを感じとること。けっして、こちらの予定テーマを持たぬこと」だった。」

(p.114)

◇「相手の話のなかに聞きたいことを求めた森崎に対して、山崎は、聞きたいことが自分自身のなかに強くあったのであり、ここには、「語る歴史、聞く歴史」の二つの大きな方法の相違が横たわっていた。」(p.114)

☆森崎の聞き書きの特徴：相手（語り手）の意思・感情に付き従い伴走する→核心に到達することを目指す

☆語り（言葉）の周囲にある全体性（「エネルギー」／「肌ざわり」）を重視：頭で分析するのではなく丸ごと身体的に相手にぶつかって（自らを投げ出して）いく

---